子どもの「自尊心」から解くいじめ・学校教育への示唆

櫻井 里穂（広島大学）

1. 研究背景

本研究は、子どもの「自尊心」に注目し、その形成過程と、いじめや不登校問題に与える影響を検証することを主な研究目的とする。具体的には、自尊心が「どのように生まれ、また、育まれた自尊心が生徒の向学校文化として、もしくは、いじめなどの反学校文化としてどのような形でつながっているのか」という点について、日本の学校と途上国の学校とを比較検証する。今回の報告では、日本の学校で2013年9月～12月に行った調査結果を報告する。尚、通常心理学で“self-esteem”（セルフエスティーム）と訳される「自尊心」の定義は一律ではないが、本研究では「自己肯定感」「自己受容」（岸見、2010）と定義づける。

子どもの自尊心に注目する理由は、日本の学校で数多く報告されているいじめ問題がある。文部科学省が昨年12月に発表した平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」報告書によると、この年のいじめの認知件数は約18万件、小・中学校の不登校児童・生徒数は近年微減傾向にあるものの小学校で0.3%、中学校では2.6%が不登校とされている（文部科学省、2013a）。こうした背景もあり、同省はいじめ問題を深刻な状況とし、「豊かな心を育む教育」として道徳教育の充実化を掲げている（文部科学省、2013b）。しかし、年間18万件という児童・生徒の「いじめ」問題には、子どもの家庭での様子はもちろん、友達との関係が自己肯定感とどう関連しているか、なども慎重に検証する必要があるだろう。

近年、自尊心や幸福感に関する研究は増えているが、比較的大学生以上を研究対象

とし、小中学生に注目した研究は限られている（c. f. 吉武、2012；櫻井、2012）。また、いじめ問題と自尊心との関係に関しては、その多くが学校保健の観点から「いじめられると自尊心が低くなる」と心理的影響を検証している研究や、「レジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキルといった能力の有無がいじめの被害を受けた際に与える影響」など、被害者側に注目し論じた研究がある（菱田ほか、2012）。しかし、いじめ問題の軽減には、加害者側の自尊心もどう影響しているのかも加味して慎重に検証する必要があるように思われる。

本研究では「自尊心」をキーワードにそれが豊かな人間性や生きる力となるプラスの側面や、いじめなどのマイナスの側面にどう関連しているかを掘り下げて検証し、喫緊の教育課題の一つである「いじめ問題」についての示唆を得たい。

2. 調査方法

研究手法は、無記名の自記入式質問紙法とその統計分析とした。質問紙調査には主としてヒュブナー教授グループが開発した「多次元による生徒の生活満足度尺度（MSLSS）」（1994）を用いた。MSLSSは、「家庭（家族）」「友達」「学校」「地域」「自分自身」に関する40項目から成り立っており、小学3年生から高校3年生の児童・生徒の総括的な多次元間の生活満足度を計るのに有効であるとされている（Gilman, Huebner & Laughlin, 2000）。

本研究では、「家庭（家族）」「友達」「学校」「地域」「自分自身」に関する項目に加えて、「授業（勉強）」に関する項目、「いじめ（加害・被害）」に関する項目、そして家

の手伝いなどの参加度を問う項目、最後に自由記述で「楽しかったこと」を聞いた。背景の質問としては、性別・年齢、同居家族のほか、所有の本の冊数やご飯を家族と一緒に食べるかどうかなど、の質問も加えた。尺度は「とてもあてはまる」、から「全くあてはまらない」の6段階である。

調査は、2013年秋、地方政令一都市の公立中学校5校で行い、調査対象は中学1年生から3年生すべてとした。本調査は国際比較研究であり、日本以外の国の調査においては、発表者が現地の学校に出向き、子どもたちに対面調査を実施しているが、日本ではそれが難しいため、報告者が用意した手引書に従い、学級担任の先生に調査用紙の配布・回収を依頼した。5校すべてから協力を得て、約2200人分の有効回答を得た。

3. 調査結果（一部）

有効回答を得た質問紙について分析を行った。平均年齢は男女ともに13.5歳であった。まず、それぞれのカテゴリーの相関を確認し合成項目を構成した。質問項目の妥当性を見るため信頼性分析を行ったところ、クロンバックの α の数値は、それぞれの合成項目で、0.945「家庭（家族）」、0.908「友達」、0.924「学校」、0.887「地域」、0.921「自分自身」、0.731「授業（勉強）」と0.778「いじめ（加害）」と、0.825「いじめ（被害）」とおおむね良好であった。

次に、合成項目の男女の平均を比べると、「地域」と「いじめ（被害）」に関しては、男女で有意差が見られなかったが、「自分自身」に関する項目と、「授業（勉強）」に関する項目では男子の方が満足度が高かった。女子は、「家庭（家族）」、「友達」、「学校」で男子より満足度が高く、また「いじめ（加害）」に加担している割合が男子より有意に低かった。これは、いじめに関する多くの先行研究と同じ結果であった。それぞれの項目の相関や、学年別の分析、自尊心が各

項目ごとに与える影響などについての詳細な分析は、報告時に発表する。

（参考文献）

- 岸見一郎 (2010) 『アドラー心理学入門—よりよい人間関係のために—』ベスト新書。
- 櫻井里穂 (2012) 「子どもの就学・労働と自尊心」、澤村信英・内海成治著『ケアの教育と開発』第9章 173-192頁。
- 文部科学省 (2013a) 『平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について』文部科学省初等中等教育局児童生徒課。
- 文部科学省 (2013b) 『今後の道德教育の充実・充実方策について（報告）』道德教育の充実に関する懇談会資料。
- 菱田一哉、ほか (2012) 「いじめの影響とレジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキルとの関係（第2報）—新潟市および広島市の中学校8校における質問紙調査より—」『学校保健研究』第53巻 509-526頁。
- 吉武尚美 (2012) 「中高生の生活満足度に対するポジティブな個人内特性と対人関係の関連」『発達心理学研究』第23巻 180-190頁。
- Gilman, R., S. Huebner & J. E. Laughlin (2000). "A First Study of the Multidimensional Students' Life Satisfaction Scale with Adolescents" *Social Indicators Research* 52, 135-160.
- Huebner, E. S. (1994). "Preliminary Development and Validation of a Multidimensional Life Satisfaction Scale for Children." *Psychological Assessment* 6 (2), 149-158.
- （注）本研究は、平成25年度-27年度 科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）（研究課題名「子どもの自尊心の国際比較から解く、生きる力・いじめ・学校教育への示唆」〈研究代表 櫻井里穂〉）の助成を受けて行った研究である。